

ADULT ONLY
R♥18



おむっ娘PARTY!9

おむっ娘プチオニリー『おむ☆フェス9』開催記念合同誌

おむっっ娘PARTY!9

おむっっ娘プチオンリー『おむ☆フェス9』開催記念合同誌







目次

<カラーイラスト>

3 ショタT督

5 中表紙

6 もくじ

<イラスト&漫画>

7 ジョン・マロ

11 西野沢かおり介

12 羊会長

13 God Hand Mar

15 山野すもも

19 日向あおい

20 雛良

21 うみノ爬虫類

<小説>

22 ビアード

30 russellheadd

37 平野月子

<フリースペース>

46 瑞光ちのん

47 西野沢かおり介

48 ジョン・マロ

49 蜜姫モカ

50 Feline Babies

51 おむ☆フェス8

アフターレポート

53 あとがき

57 編集後記・プチオンリーのれん

58 おくづけ

おむつつ娘Party!9

おむつつ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス9』開催記念合同誌

表紙 / 蜜姫モカ 裏表紙 / たく のれん / 星山カケル (敬称略)







ういあー
あだると
のっ



きゅーと
ぺいぴいず!!

あー!

パツッ... じゃなくて
おむつがバレちゃうっ



ご主人様！♡もっとお浣腸入れてください！♡
仕事が生きがいだった三十路独身女が
いい歳してツインテールで赤ちゃんが履くみたいにな
かわいらしい柄の大人向けおむつを履いて
無様に媚びている姿を見せますので！♡

おおっ！♡入ってきてる！♡
カチカチの便秘気味グソを溶かすような
熱くて濃いお浣腸液！♡これで本目え！♡
！この後グソをひり出せ？♡わかりましたあ！♡
浣腸液混じりの下痢便出す所を見てください！♡



悪因悪果の絶望配信

あら、ようやく目覚めたわね。配信の時間に間に合つてよかったわ。ゆっくりと自己紹介をしたいところだけどあまり時間が無いから早速説明に入らせてもらうわね。

遠藤美緒さん、これからあなたの様子がとある会員制のサイトで配信されるわ。最初は顔にモザイクを入れるから顔を見られる心配はないわよ。おっぱいとかは出ちゃうけどそこは我慢してね。配信が始まったら浣腸の注入が始まるわ。すぐにお腹が痛くなると思うけどウンチを漏らさないように耐えてね。漏らさずに15分経てば配信が終わるわ。配信中は視聴者を退屈にさせないために一定時間毎に妨害イベントをやるから覚えておいてね。

もし我慢できずにちよつとでも漏らしたらモザイクが外れて顔が公開されるわ。それと同時にあなたの全ての個人情報配信用画面に表示されるわ。この配信を視聴する変態達があなたの個人情報を知つたらどうなるかしらね。間違いなくただじゃすまないわよ。そういうことだから死ぬ気で我慢してね。

「どうして私がこんな目に」って思つてるでしょ？ 心当たりがないとは言わせないわよ。資料を見たけど、今まで何度もパパ活の相手を恐喝したり、何件も痴漢を冤罪でつちあげてるわね。あなたのせいで何人の人生が狂つたことが。ここはね、世の中にとって害悪にしかならないクズを懲らしめる場所なのよ。さて、説明も終わつたし早速配信を始めましょうか。



在学証明書



学生番号 2106205
所属 普通科
学年 3年6組
氏名 遠藤 美緒
生年月日 2005年11月4日
入学年月日 2021年4月1日

上記の者は本校の在学学生であることを証明する。
神奈川県大磯町大磯3-18-18
私立神楽女子学園
校長 木田村 香枝子

個人情報公開

氏名 遠藤 美緒
生年月日 2005年11月4日
身長 163cm
体重 46kg
3サイズ 93/62/85
アカウントID
RINE:mio1104
Chatter:mio1104
Finebook:mio.endo.1104
パスワード
全て「mio20051104」

家族構成
父：遠藤 孝弘(42)
財務省本省勤務
母：遠藤 美里(38)
専業主婦
妹：遠藤 美南(14)
中学生(水泳部)
住所 神奈川県大磯市
湯末矢倉6-1124
電託 采旦

残り時間

1:58

タイムテーブル

- ✓ 15:00 流腸開始
- ✓ 12:00 強力鼻フック
- ✓ 10:00 乳首ローター起動
- ✓ 8:00 スパキンゲン
- ✓ 6:00 膣内ローター起動
- ✓ 4:00 蝋燭垂らし
- × 2:00 クリローター起動
- 0:10 腹パン!

悪意の履歴

- ・痴漢冤罪 8件
- ・パパ活相手を脅迫 16件
- ・万引き 常習 (個人経営の店が4店閉店)
- ・恐喝及び暴行 複数回
- ・器物破損 複数回
- ・飲酒後の無免許運転
- ・いじめ加害 6件

配信コメント▼

てつてつ吸ッてはいて！

もう出ちゃうコシ

【運営】残り時間2:00 クリローターを起動しました。

おおっ！

【運営】残り時間1:58でお漏らしを確認したのでモザイクの除去及び個人情報の公開を行います。

やっぱりクリローターでアウトか〜

腹パンまで耐えて欲しかった

うわ、イキながらクリ漏らしてるよ

個人情報ゲッツ！

ホントだ、痙攣しながら漏らしてる！

お家にたくさんオムツ送るね。もちろん着払いでw

バスワード全部一緒とかクリ情弱w

こんなの見られたら人生終わりだね

名前と生年月日がバスワードって頭悪すぎだろw

矢倉6丁目か 近所だな

流腸も送ってやれ！

個人情報と豚ソウと脱糞アक्रम、数え役満！

財務省に電凸しなきゃ！

お母さんと妹の分も送ってあげようぜ

【運営】配信終了後、最初からモザイクを除去したアーカイブを公式サイトにアップします。

親が上級国民だとこんなにクズな子供になるんだな

変態AV女優としてデビューしないかな

運営サンキュ！

こいつのSNSに動画アップしてやるうぜ！

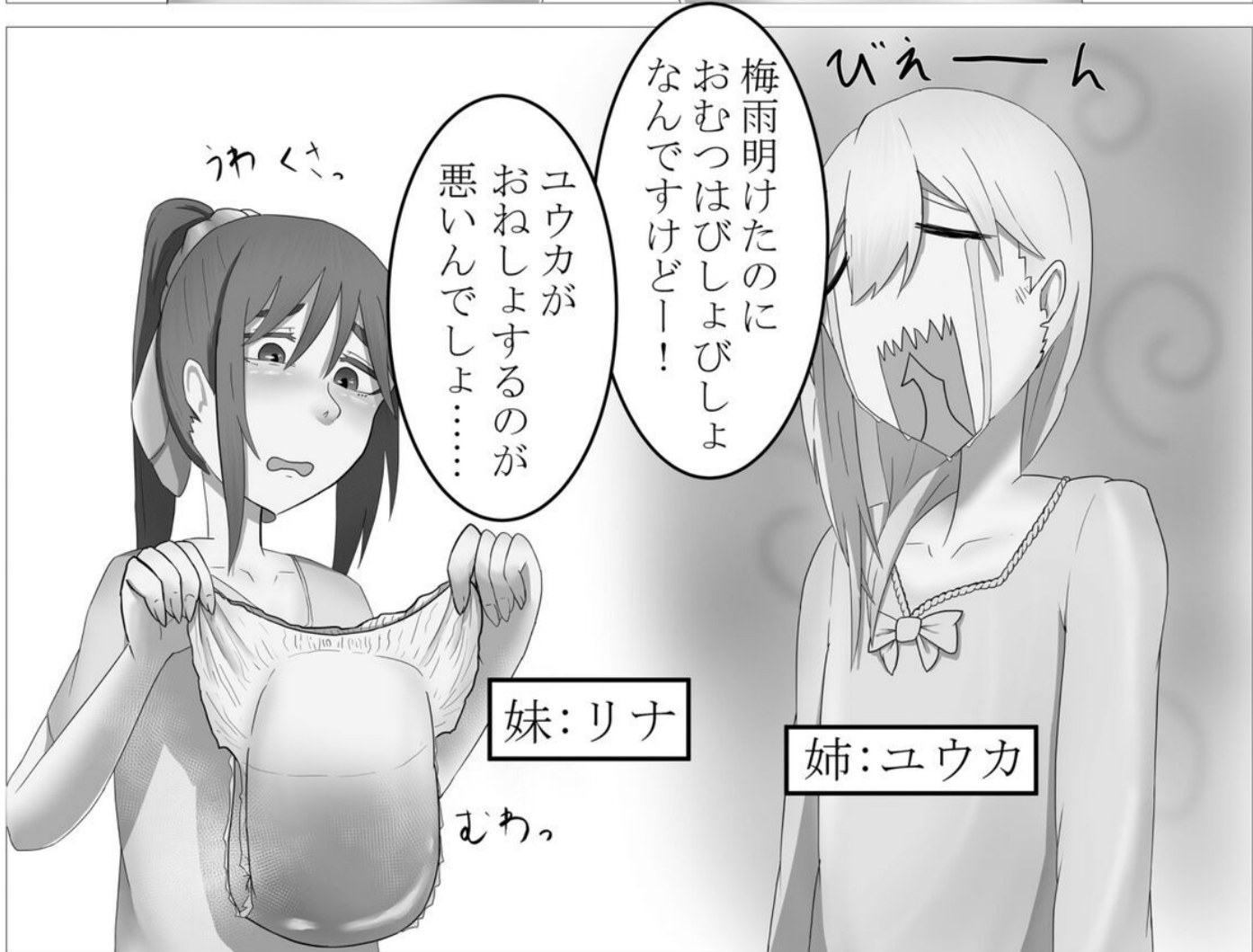
すげえ量だな。オムツから溢れそう

【運営】個人情報と学生証の画像データはこちらからダウンロードできます。
<http://yonaoshi.private/download/no-062/39756248>

コメントを入力

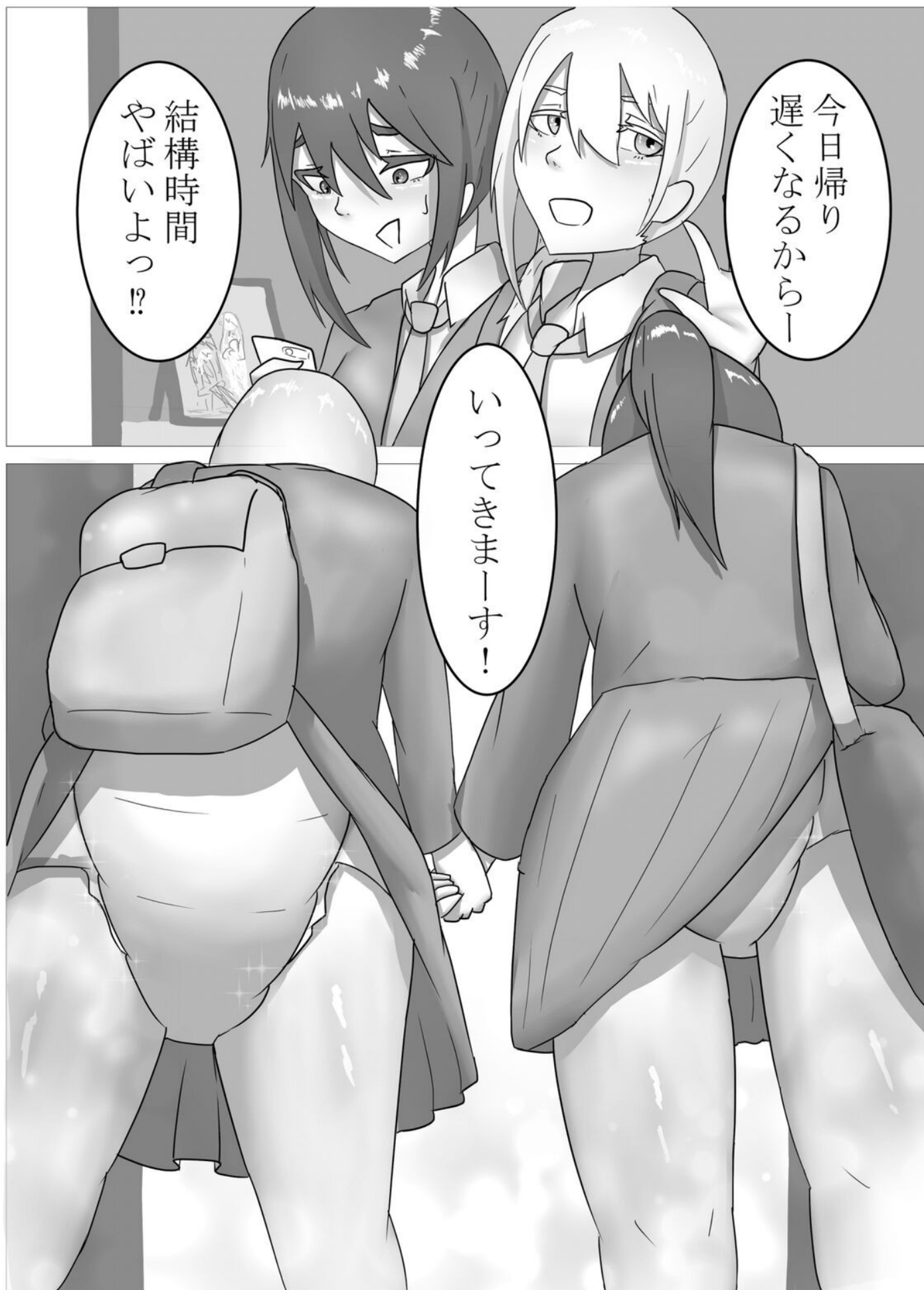
👤 1,925 🗨️ 3,516 ❤️ 1,064

入園者募集中











ニワ子の魂百まで。



ついにおむつ
とは……

オレも堕ちる
ところまで
堕ちたな……

あひっ

たふたふ
してる……

わあ

たふたふ
たふたふ

姫様がおむつを卒業出来ないのは、
多分俺のせい

ビード

耳を澄ませば、聞こえてくるのは剣のぶつかり合う金属音。辺りを嗅げば、漂うのは血と硝煙の臭い。

ここ最近、嫌と言うほど見てきた、いつもの戦場の風景だ。

「折角の非番だったのに、族共も空気を読んでほしいものだ」

「ぼやくなよ、アラン。これが俺達騎士の仕事だろ」

王城騎士にとつてたまの休みほど貴重な物はないって言うのに、どうして族つてのはこういう時に限って村を襲ったりするんだろうか。

しかも腹立たしいのが、こいつらは別に金に困っているわけではなく、西の隣国が金を握らせて、うちの国の領土を襲わせているってところだ。

うちの国は大した国力は無い物の、自然に恵まれているのか、資源だけは豊富だった。

そのため、それらの資源を輸出することで他国からも国として認めて貰えているわけだが、そうなる当然、直接支配して資源を持ち去ろうって国も出てくる。

だがいきなり戦争なんか仕掛けたりすれば、他の国からも批難される。

だから西の隣国は族をけしかけてうちの国を困らせつつ、軍事協定を提案してきている。その協定にのればうちの国を守ってくれるのとこのだが、それと引き換えに資源を搾取されるのは目に見えている。とんだマッチポンプさ。

当然、こんなふざけた提案を国王達が飲むわけもなく、こうして隣国が仕掛けてくる族達に俺達騎士が毎回対処しなければならなくてわけだ。

「おい、何か囲まれてねえか？」
その時、仲間の一人がそう言った。

ふと気が付くと、確かに思ったより多くの族に俺達は囲まれていたようだ。

「俺達だけで、この人数を相手にするのは少し厳しくないか……？」

「だな……仕方ない。一旦引いて、他の仲間と合流するか」

「だが、逃げるって何処へ逃げれば良いんだ……？」

確かにパツと見、どの道も族達に塞がれている。

強行突破でもない限り、逃げ切れないか……なんて思っていたが、ふと横に目をやると、細い路地が見えた。流石にそっちには族の姿もない。

「こつちだ！ 急いで逃げろ！」

俺は他の仲間達を引き連れ、その路地へと逃げ込んだ。しかし……。

「おい、行き止まりじゃねえか！」
「ちっ！ もう逃げ場がねえぞ！」

その選択は完全に裏目に出た。逃げた先は行き止まり……そして引き返そうにも、元来た道

には沢山の族共がひしめき合っている。

「くそっ……まさかここまでかよ……!!」

俺達がそう覚悟を決めた時だった。

俺達へ襲いかかろうとしていた族の一人が、突然悲鳴を上げて倒れた。

何事かと思つて倒れた族の方を見ると、そこには一人の少女が立っていた。

「袋のネズミとて、自ら袋に入り込む奴は居ないというのに、お前達ときたら」

少女は俺達を見ると、呆れたようにそう言い放った。

「ひ、姫様!? いや、その……俺達は……!」

「言い訳は後だ。まずはここを出る。手伝え」
そういうと、姫様は剣を構え直し、族達に向き合った。

族は、単なる少女に過ぎない姫様ぐらい、簡単に倒れると思つたのだろう。束になって一斉に姫様へ襲いかかった。

だが次の瞬間、族達の攻撃はことごとく空を切り、代わりに族達の身体が姫様の剣によって

切り裂かれていく。

まるで子供の戯れとでも言わんばかりに、余裕の表情をちつとも崩すことなく、族達の攻撃を受け流し、あつという間に族達の死体の山だけが積み上がっていった。

そして気が付くと、手伝えとは言われたものの、結局俺達が何をするでもなく、姫様が族を全て倒しきってしまった。

「あ、ありがとうございます、姫様! 助かりました!」

「助かりました、ではない。私が姫で、お前達が騎士だ。騎士が姫に助けられていてどうする」

「す、すみません……」
姫様はとてつもなく呆れた目をして俺達を見やった。

俺達は、自分達の不甲斐なさに、もはや返す言葉もなかった……。

「アラン。お前には、小隊長としての地位までやったのに、まだこんな体たらくを見せているのか。やる気はあるのか?」

「申し訳無いです、姫様……」

「どうやら、お前はまだしごき足りないようだ。今夜も私の部屋へ来い。きつちりと鍛え直してやる」

そう言つて、姫様は俺達の前から去つて行った。残された俺は、一つため息を吐いた。

「今日も呼び出しか……大丈夫か、アラン? 姫様の鍛錬つて、かなり厳しいし……」

「ああ、大丈夫だ。心配しないでくれ、もう慣れたからさ」

ひとまず族達を退けることができたので、一旦この場は解散となった。

そして俺は、また一つため息を吐きながら、城へと戻っていった。

その日の晩、俺は言われたとおり姫様の部屋へやってきた。

だがそこには、族に一切怯むことなく戦い抜いた凜々しい姫騎士の姿はなく、今にも泣きそうな顔になって、震えている少女がベッドの上にぼつんと座っているだけだった。

「バカ！ 来るのが遅いっ！ こっちはずっとおしっこ我慢してたのよ!? 早く、おむつをあてなさいよ！」

そんなことを言ってくる姫様に対し、俺は昼間とは違う理由でため息を吐いた。

「昼間はアレだけ、俺のことバカにしていたくせに」

「うう……だ、だって……ああいう態度してないと、あんたへの想いを、抑えられなくなっちゃうんだもの……！」

顔を真っ赤にして泣きそうになりながら、姫様は情けない声で俺へそう言ってきた。

本当に、こんな姫様の姿、他の連中が見たらどう思うだろうか……。

「アラン、早くして……！ おしっこ……もれちゃうっ……！」

「はいはい。分かりましたよ、姫様」

俺は姫様へそつと近寄ると、姫様のネグリジエの裾をたくし上げる。

そして、少しばかりおしっこのシミが付いてしまっているパンツに手を掛け、するつと下ろ

した。

それから、洗濯場からこつそりと持ち込んできた布おむつを広げると、姫様の股下へ敷いて、そつと秘部を包むようにおむつを当ててあげた。

「もう……していい……？」

「待てっ！ まだ、カバーを留められてないから……！」

「でも……もう、むり……！ 出ちゃう……！」

そう言い終わるが早いか、姫様の秘部からぶしゃつと生暖かいものが噴き出した。

そしてその生暖かい液体が、洗濯したばかりの布おむつの中へと沁み込んでいき、ほんのりと洗剤の匂いを漂わせていたおむつの布地が、あつという間におしっこ臭く染められていった。

「お、おい!? まだおむつを留めてないって言うてるだろ！」

「ご、ごめん……でも、がまんできなかったのよ……っ！」

俺は大慌てで、カバーの上から直接手でおむつを押さえた。

姫様の秘部へ自分の手を押し当てるように、

しっかりとおむつの上からおしっこの出口を抑えつける。

こうでもしないと、おむつの端から姫様のおしっこがベッドへ溢れてしまいそうだったからだ。

（ああ、くせえ……しかも、このめちゃくちゃ生暖かい感じが手に伝わってくるし……最悪だ……）

目の前で姫様がおしっこするものだから、その臭いももろに嗅いでしまうし、生暖かいおしっこの感触なんて、気持ち悪いもの以外の何物でもない。

それが例え姫様のものであったって、所詮おしっこはおしっこだ。それは老廃物であり、嫌な物だ。

「姫様。めちゃくちゃ臭いんですけど、もう少しどうにかありません？」

「う、うるさい！ 臭いなんて、私にどうしろって言うのよ!? というか、嗅ぐな！」

「いやいや！ おむつの世話させといて、どうしたら嗅がずに済むって言うんです!?」

俺だって、姫様のおしっこ臭いなんて嗅ぎたくない。

「うう、おむつ越しとは言え、姫様の秘部へ手を押し当てるなんて本当はしたくないし、こんなの誰かに見られたら色々誤解を招くだろう……。」

「とはいえ、姫様の命令である以上は、逆らえないしな……。」

「姫様、まだ出るんですか？ 長くないですか？」

「うう……すごく我慢してたんだから、しょうがないじゃない！ とうか、そもそもあんたが早く来てくれないから、すっごい我慢するハメになったんじゃない！」

「そもそもいい歳して、夜はおむつじゃなきやトイレできない姫様が悪いでしょう。大体、いつまでも夜のおむつが取れないなんて、一国の姫として恥ずかしいとうか……。」

「うるさい、うるさい！ それ以上言ったら、ひっぱたくわよ!？」

姫様は顔を真っ赤にしながら、俺へそう言い

放つ。

毎晩のやりとりではあるが、俺はまた一つため息を吐きながら、それを聞き流した。

何故、一介の騎士ではない俺が、わざわざ夜中に姫様の部屋まで来て、姫様の秘部に布おむつを押し当てて、姫様のおしっこを済ませてあげないとならないのか……。

それは、10年くらい前の話に遡る。

俺の家は代々、王城に仕える騎士の家系だった。そのため俺も子供の頃から王城に出入りしており、歳の近かった姫様とも、その頃から顔なじみだった。

というよりも、父が騎士団長だったこともあってか、その子供である俺は姫様の遊び相手としての役割を任せられていた。

姫様は昔から勝ち気だったとうか……俺のことは家来のような感じで見ていて、ことあるごとに理不尽な命令をされては、俺はそれに奔

走する日々だった。

そんなある日の夜、俺は遅くまで父から剣の稽古をさせられ、すっかり疲れ切った俺はふらふらと自室へ向かって歩いていった。

その時、王城の廊下で姫様の後ろ姿を見つけ たんだ。

姫様の姿を見つけた以上、避けるというのはなんか良くない気がして、とりあえず特に深い意味は無かったが、挨拶ぐらいはしようと思った。

それで後ろから姫様に軽く声を掛けたんだ。

そうしたら、姫様はかなり驚いたようで、悲鳴を上げて……かと思うと、姫様のスカートがじわじわと濡れ始めて……びちゃびちゃという音がして、姫様の足下に嫌な臭いの水たまりが広がっていった……。

俺は一瞬、目の前で何が起きているのかよく分からなかったが、突然姫様が泣き出して、それで俺もハッとしてようやく気付いた。

いつも生意気ばかり言って、俺へ偉そうにアレやコレや命令してくる姫様が、俺の目の前でおもらしして、しかも顔を真っ赤にして泣きじやくっているんだって。

姫様は泣きながら、俺に何かを怒鳴っていたが、言いたいことが上手く言葉に出来ていないのと、嗚咽で言葉が詰まりまくっているせいで、もはや何を言っているのかさっぱり分からなかった。

ただかろうじて聞き取れた部分を要約すると、どうやら姫様がおもらしをしたのは俺のせいらしく、その責任を取れと命じられているようだった。

俺は別に、姫様をおもらしさせるつもりなんて微塵もなかったし、そもそも姫様がトイレを我慢していることだって知らなかった。

そう釈明したが、もうおもらしでパニック状態の姫様には当然聞き入れて貰えなくて……それで、俺が責任を取るようになってしまったの

だ。

その後、少し落ち着いてきた姫様から色々話を聞いたが、姫様はどうも昔からお化けが怖いようで、そのせいで夜のトイレに行けないらしい。

だからいつも、夜はこっそりとおむつを穿いて、おねしょをやり過ごしていたという。

だが、姫でありながら自分自身もいつか立派な騎士になりたいと願っている姫様は、いつまでもおむつが取れないようじゃ、立派な騎士にはなれないと思っていた。

だからこの日の夜、勇気を出してトイレまで行ってみようと頑張っていたらしい。

しかしそこへ運悪く、急に俺が後ろから声を掛けたものだから、ものすごくビックリして……おしっこを漏らしてしまったようだ。

姫様はもう夜のトイレなんて怖くて二度と行けないと言い、俺のせいで一生おむつが取れない

くなったと喚いた。

俺は、これから毎晩、夜のトイレに付きそうから、少しずつ夜のトイレへ慣れていこうと提案したが、無理だと一蹴された。

そしてさっき言っていた、責任を取るという話だが、毎晩俺が姫様の部屋へ行って、おむつを当てたり取り替えたりすることが、その責任という奴らしい。

具体的には、まず夜寝る前におしっこを済ませないといけないので、おむつをあてがって、おしっこをさせてあげる。

だが、それで終わりではない。姫様は未だにおねしょ癖があるようで、今でも時折寝ている間におねしょをしてしまうことがある。

なので、寝る前のおしっこが終わったら、そこからまた別のおむつに取り替えてあげ、寝かしつけなくてはならない。

それから、おしっこで濡れた方のおむつをこっそりと洗って干しておき、翌朝メイドが姫様

の部屋へ行くよりも早く、俺が姫様を起こしに行って、おねしよしていないかチェック。

そこでおねしよをしていたら、そのおむつも洗ってあげないといけない。これが毎日だ……。

この説明で分かると思うが、姫様のおむつには、夜トイレ用おむつとおねしよ用おむつの2つを用意している。

姫様がおねしよした日には、俺は一日に2回もおむつを洗わねばならない……しかも誰にもバレないように洗濯しないといけないのだから、気も遣うし本当にこれが疲れる……。

だが結局あの日以降、俺は毎晩姫様の部屋へ行って、こうして姫様のおむつの世話をしているのだ。

そして、それがかれこれもう10年と続いてしまっている……。

もちろん姫様も、いつまでもおむつを卒業できないことが恥ずかしいことだという自覚はある。

だから、俺以外の誰にもこのことは言っていないし、知られていない。

両親である国王夫妻も、姫様仕えのメイド達だって、姫様が未だに、夜はおむつをしていることを知らないのだ。

「ん……おしっこ終わったから、おむつ取り替えて……」

俺のあてがったおむつの中で、おしっこを最後の一滴まで出し切った姫様は、小声で俺へそう言ってきた。

「最近はおねしよしなくなってきたし、おねしよ用のおむつをしなくて寝ても大丈夫じゃないですか？」

「そんなこと言われても……今夜おねしよしないなんて、言い切れないし……おむつしなきゃ、不安で眠れないわよ……」

そう言って、おむつを取り替えて欲しいと、姫様は俺へねだってきた。

「姫様……貴女はもうすぐ結婚して、王妃にな

るのでしょう？ それなのに、いつまでも夜のおむつが取れないようじゃ、まずいでしょ」

俺がそう言うと、姫様は俯いてしまった。そして、小さな声で俺に言う。

「……結婚なんてしたくない……今更、夜のおむつを卒業するなんて、私にはできないもの……」

「何をバカなことを言っているんですか。おむつなんて、いつだって卒業出来ますよ。それに、貴女がこの結婚を拒んでしまったら、この国の未来はどうなるって言うんですか？」

「そんなの知らないわよ！ 卒業できないものは、できないんだからっ！」

子供のように駄々をこねる姫様。その姿を見て、俺はまた一つため息を吐いた。

姫様は、もうすぐ東の大国の王子と結婚することになっている。

東の大国は強大な軍事力を持っており、彼らと同盟を結ぶことができれば、もはや西の隣国が送りつけてくる族など何も恐れることはない。

東の大国とは、長い外交の末、貿易やらの色々な協定を結び、両国が経済などを支え合うことで、互いに団結しようという話になった。

そして、この同盟を結ぶ上で一つの条件が出された。それが姫様が隣国の王妃として嫁ぐことだ。

この婚姻話は本人の同意も何も無く、両国の国王間で、勝手に取り決められたものだった。

勝手に結婚相手を決められてしまった姫様に、もちろん同情の念はある。

だが、姫様がこの結婚を拒めば、国王同士を取り決めた、うちの国が一方的に破棄したということになる。

そうなれば当然、東の大国との関係も悪化し、両国間での戦争は避けられない。

そうなった場合、この国の軍事力ではまず東の大国には勝てないであろう。

つまり、戦争が起これば、この国には支配される未来しか残らないのだ。

おまけに、この国の資源を狙って西の隣国が東の大国と手を組むことだって考えられる。

つまり、ここで東の大国と同盟を組めなければ、もうこの国には一切の希望が残らないのだ。

「姫様だって、この結婚の意味は分かっているのでしょう？」

「もちろん、分かっているわよ……この国の未来が掛かっているってことだって……。でも……

それでも、好きでも無い相手と結婚なんてしたくない！ あんたと……別れたくない……。あなたと別れたら、一体誰におむつを替えて貰えば良いって言うの……？」

俺は少し考え込んだ後、意を決して姫様へ言った。

「これを機に、おむつを卒業すれば良いんですよ。それに向こうの王子は、人柄も良く民からもよく慕われていると聞いています。その方と結婚することは、姫様にとっても幸せなことですよ」

「でも……おむつの卒業なんてできない！ だ

けど、この歳でおむつが卒業出来てないって知れたら、流石に王子だって私のこと軽蔑する……だから、私は王子と結婚なんてできない……。このままずっと、あんたにおむつを替えて欲しいの……」

そう言っ、姫様はネグリジェの裾を捲ったまま、俺の方へおしっこ臭くなったおむつを見せつけてきた。

「……分かりましたよ、姫様」

俺は、すっかりおしっこを吸って黄色くなった、夜トイレ用のおむつをそっと姫様の秘部から外した。

その瞬間、おしっこの臭いがムワッと広がって、少し咳き込みそうになったが、そこはなんとか堪えた。

それから、綺麗な布で姫様の秘部を軽く拭き上げると、おねしょ用のおむつを取り出して、それで姫様の秘部を包んだ。

そして今度こそ、しっかりとカバーを留めてあげる。

「終わりましたよ、姫様。明日も早いから、もう寝ましょう」

「分かったわ。ありがとう……明日の朝もお願いね、アラン」

「……ええ」

俺は、姫様のおしっこで濡れたおむつを持って部屋を出ると、いつものようにそれを洗うことはせず、ゴミ捨て場へと捨てた。

そして自室へ戻ると、俺はそのまま荷造りを始める。

「……これで良いんだ……」

俺は明日から、僻地での任務に当たることになる。少なくとも、数年は王城へ帰ってくることはない。

普通に考えれば左遷も良いところだが、この異動は俺が父に頼み込んで、そうさせてもらったものだ。

きっと、俺が姫様の傍に居続ければ、姫様はいつまでもああやって、甘え続けておむつに依存し続けてしまう。

だから、姫様のおむつを卒業させるには、いつそ俺が姫様の傍から居なくなるしかないんだ。

それがこの国の為……そして、姫様の為だから……。

ふと気が付くと、さっきまで静かだった窓の外が喧騒に満たされていた。時計を見るとお昼は疾うに回っていて、小学生の下校時刻。ぐうとお腹が鳴り、そういえばまだ昼を食べていないことに気付いた俺はレポートのファイルをセーブして一つ伸びをした。大学に通い始めて三カ月、慣れないレポートに四苦八苦しながらも、高校とは違う自由の多い生活を満喫していた。

『ほのかもそろそろ、かな』

冷蔵庫にあったサンドイッチをペットボトルのコーヒードで流し込みながらそんなことを考えていると、予想通り玄関のドアが開く音が聞こえてきた。

「おかえり」

台所から玄関へ向けて声をかけながら、俺はほのか用に冷やされていない麦茶を彼女がいつも使っているグラスに注いで、帰ってきた妹を待った。しかしグラスの主はいつまで待っても台所に姿を見せなかった。

「ほのか？」

俺が玄関の様子を見に行くと、そこにはランドセルを背負ったまま立ち尽くしている妹の姿があった。歯を食いしばり、背中をそらせているその姿と、わずかに鼻をつく異臭が彼女に何が起きているかを伝えてくれた。

「にーにー」

俺の顔を見て気が緩んだのか、その一言をつぶやいた瞬間、彼女の瞳に大粒の涙が浮かんできた。もはや靴を脱ぐどころか、脚を上げることも

できない彼女がここで限界を迎えてしまうのは明白だった。俺はそっと玄関を降りて彼女の背後に回り、制服のスカートの裾をめくった。そこに隠されていたのは年相応の木綿の肌着ではなく、クロッチの部分が厚ぼったく防水加工されたトレーニングパンツだった。しかしその防水機能はもはや機能しておらず、股ぐりのパイピングを伝って外側の生地まで茶色いシミが広がっていた。さらに大きくスカートをめくりあげ、トレーニングパンツの腰の部分に指をかけて引っ張ると、こねまわされた汚れがお尻全体に広がり、内側のパイル生地に絡みついているのが見えた。恐らく限界を迎えて少しずつ漏らしながらも頑張って歩いて帰ってきたのだろう。

「よしよし、よく頑張ったな。あとはにーにがするから、もう我慢しなくていいよ」

「あ……あ……ひう……」

ゴムから指を抜いてスカートの裾を整えるのと同時に、ほのかの腰が後ろに突き出された。いわゆるへっぴり腰の姿勢だ。おそらく限界を迎えた体が、本能で彼女を苦しめる原因を押し出すのにもっとも楽な姿勢をとらせようとしているのだろう。ぐるぐるとお腹が大きく鈍い音を響かせた。

「や……ああ……あ」

喉の奥から小さな悲鳴が上がり、小さな彼女の身体が大きく一つ震えた。そしてこれまでの緊張から解放されたように全身から力が抜け、瞳は理性を失い虚空をさまよった。数秒遅れてスカートの中から玄関の三和土へばたばたと雫がこぼれた。

「ああー……あー……」

最初は静かに吐き出されていた汚物だったが、次第にガス混じりと

なって断続的にくぐもった破裂音が玄関に響き、呆けたように開いた口から聞こえていた呻きは次第に泣き声に変わっていった。泣きじゃくるほのかを撫でながら俺はこれから後の段取りを頭の中で考えていた。

「帰りにっ、ひっく、お腹、痛くなって、うえっ」

バスタブに手をついたまま、ほのかは一生懸命言葉を紡いでいた。彼女の足下にはさっきまで穿いていたトレーニングパンツが無残な姿をさらしていた。俺は元の真っ白な素肌を取り戻すために、どろどろに汚れたおしりへ温めのシャワーをかけながら彼女の話を聞いていた。

どうやら学校で食べた給食と相性が良くなかったらしい。ただでさえお腹が弱い彼女にとって、給食で出される慣れないメニューは地雷になることも多い。

『それにしても最近「失敗」が多いな…』

みずみずしいおしりを洗い流しながら、うつむいたまましゃくりあげている彼女のことを考えた。

今年小学5年生になった妹のほのかは小さい頃から身体が弱く、熱を出したり、夜中に病院に駆け込んだりということもしょっちゅうだった。そして彼女をもう一つ苦しめているのがトイレの悩みだった。まだ毎晩おねしょをしてしまうし、小学校に入ってから帰り道や、時には授業中に下着を汚すことも少なくなかった。それでも中学年になる頃にはだいぶ減ってきていたのだが、今年になってまた急に下着を濡らしたり汚したりして帰ってくるが多くなってきた。

低学年のころとは違ってクラブ活動や授業時間が増えて帰るのが遅くなってきたからかねえと悩んでいたおふくろが、ほのかと話し合ってたった対策がトレーニングパンツだった。幼児のトイレトレーニングで

よく使われるアイテムだが、最近小学生でも穿ける大きいサイズも売っている。大量におもらした時に防ぐことはできないが、多少のおちびりであれば6層のトレパンなら周囲にバレることもない。この年になって学校にまでおむつを穿いて行きたくないほのかと、おもらしが心配なおふくろの妥協の結果だった。

はじめのうちはトレパンのパイル生地にシミを作る程度だったのが、次第にぐっしり濡らして帰ってくることも多くなり、最近ではこんな風に溢れるほど失敗して帰ってくることも多くなってきている。：気がする。俺も毎日家にいる訳ではないからわからないけど、おふくろがぼやくことが増えてきたような。

「んっ、ふうん…」

考え事をしていたらほのかのおしりを洗っていた水流がプライベートゾーンに強く当たってしまったっていらしい。幼いながらも悩まし気な声にドキリとさせられてしまった。

「あ、ああ、ごめん、ちよっとお湯の勢いが強かったかな」

「ううん、にーに、大丈夫。おまたかゆいから、もっと洗ってほしいな」

「あ、ああ」

ボディソープを掌の上で泡立たせて、汚れが落ちた肌にそっと伸ばした。それまでほのかを包んでいた悪臭が洗い流され、いつも抱きしめた時に感じる甘い香りが浴室に広がっていった。シミ一つない真っ白な肌を優しく洗うたび、途切れ途切れに聞こえる荒い息は気のせいだと自分に言い聞かせて、俺はまだ熟れていない固い小さな桃を清めていった。

先ほどまでの汚れを洗い流してきれいになった妹の身体をバスタオルで拭き上げリビングに送り出した後、俺はほのかのドロドロに汚れた下

着を拾い上げた。強い異臭が鼻をつくが、それもかわいい妹が出したものだと思うと気にならなかった。トレパンのおしりの汚れがひどいので目立たないが、クロッチの前側にも濡れては乾きを繰り返してできた濃い黄色のシミがついていた。さっきのほのかの荒い息が耳の中でこだました。まだ幼い妹に劣情を抱くことが禁忌であるからこそ、彼女へではなく、俺は彼女の幼い秘裂が接していたその場所から目が離せなくなっ
てしまった。

その日の夜、俺の部屋にほのかがやってきた。お風呂上がりのいつものスタイルで、バジャマの上だけ着て、下半身はすっぽんぽん。手にしたオヤスママンをわかつてるよね？とでも言いたげに無言で俺に手渡してきた。いつもなら風呂上がりのほのかにこれを穿かせるのはおふくろの仕事なのだが、洗いものか何かで忙しかったのだろうか。黙って俺はそれを受け取ると、ほのかに穿かせて腰まで引き上げた。何も言わなくてもほのかはその場に寝転んで、赤ん坊のおむつ替えのようなポーズをとる。俺は股繰りに指を這わせて、ギャザーがきちんと立っていることを確認した。これをやっておかないと横もれすることは何度も経験済みだ。

「あのね、にーに…」

バジャマのズボンを着きながらほのかがおずおずと言った。

「明後日プリハートのイベント行くじゃん？」

言われてみて、ニチアサにやっているほのかの好きなアニメのショーが近所のイオンであるので、この週末にそれを見に連れていく約束をしていたのを思い出した。

「その時、これで行っちゃダメかなあ…」

ほのかはズボンを引き上げる手を止めて、まだ顔をのぞかせているオヤスママンを撫でながら頬を染めた。

「え？」

「プリハート見てる時にもし間に合わなかったら…パンツだったら、ほの、やだなんて」

ほのかは不安げに瞳を泳がせた。数年前まで、ほのかと出かけるときはかならずおむつを穿かせていた。それは遠出の時だけではなく、スーパーへの買い物の時でもそうだった。それほどほのかのトイレのコントロールは不安定で、出そうと思った時にはもう限界ということも多かった。最近は一失敗続きなのでその頃と同じような対応も必要かもしれない。ほのかは幼いころ自分のことをほのとよんでいた。無意識に自分のことをそうよんだことを考えても、このところの失敗続きで気持ちが退行してきているのだろう。ここで無理をさせてもいいことはない。

「いいよ、日曜はこっちのパンツで行こうね。でも、おトイレ行きたくなったらにーに教えるんだぞ？」

不安げだったほのかの表情がぱあっと明るくなった。せっかくのお出かけを不安で楽しめないのはかわいそうだからな。そう自分に言い聞かせながら、ほのかは衆人環視の中、このおむつにおもらしをして恥ずかし気に立ち尽くす姿を心の片隅に想像してしまい、思わず俺は目をそらしてしまった。

休日のイオン、それもイベントがあるとなるとそれなりの人出だった。人気のプリハートのイベントだけあって、こんな田舎のイオンでも結構な盛況だ。専門店街の一角に設えられたイベント会場は床に直接座るスタイルだったので、俺は胡坐をかいて、その中にほのかを座らせた。こ

うすれば床の冷たさが直接伝わらないから、少しは体が冷えないかもしれない。スカートの裾を直すふりをしながらそっと触れたほのかの下着は、まだ乾いた感触を伝えてきていた。

「みんなー、こんにちはー！」

「「「「こーんにーちはー」」」」

司会の女性の甲高い声が聞こえると、会場全体から子供の声が響き、イベントが始まった。

「おトイレ行きたかったらすぐ言うんだぞ」

魔法のボタンを握りしめたほのかの視線は既にステージにくぎ付けで、届いているかどうかはなはだ怪しかった。一応ここに座る前にトイレにはいかせたから大丈夫だとは思いうが…。

悪役との最終決戦を迎えて、シヨもクライマックスというところでほのかの様子がおかしいことに気づいた。魔法のボタンをスカートの上からおまたに押し付けてもじもじしている。

「ほのか、大丈夫か？おしっこじゃないのか？」

しかし声をかけられたほのかはというと、目を輝かせて始まる前以上に食い入るようにステージ上のシヨーに集中していて、こちらの声は全く聞こえてないようだった。

「ほのか、ほのか？」

「プリシャインがんばれー！」

ほのかがボタンを振るたびに、俺の膝にのせたほのかのおしりがじわりじわりと温かくなった。まさかと思ひスカートの中に手をそっと差し入れてみると、ほのかのオヤスママンはさっきの乾いた感触ではなく、ぶにぶにとした手触りを伝えてきた。ほのかはというと、他の子供たち同様に、立ち上がらなばかりの勢いでヒロインたちに声援を送り続けて

いた。

『やっちゃったか…』

こうなってもいいようにという保険が役立ったとはいえ、おもらしをしてしまっていることに全く気付いていないことは気がかりだった。

シヨーが終わるとほのかは満足したような顔で俺の膝の上に座り込んだ。ほのかのおしりがぐっと膝にのしかかると水分を含んで膨らんだ吸収体の感触が俺の膝に伝わってきた。

「あら？でちゃったかな？」

隣でシヨーを見ていた2、3歳の子供を連れたお母さんが不意に鼻をクンクンと鳴らして、指をくわえていたその子に声をかけた。確かに周囲には微かに異臭が漂っていた。

「あれ？してないねえ。ぷーが出たかな？」

そのお母さんは子供を抱き上げておしりの臭いを嗅ぎ、さらにおむつのおしりを引つ張って中を覗き込んでいたがどうやらうんちはしていなかったらしい。…まさか。ハツとしてほのかの顔を見ると、シヨーの余韻に浸ってという感じではなく、蕩けたような恍惚の表情を浮かべていた。隣の子のお母さんがしていたように、俺も慌ててほのかを抱き上げておしりの臭いを嗅いだ。

「ほのか：おトイレ行こうか」

俺は呆けたままのほのかを抱き上げてそっとその場を離れた。

多目的トイレに入り、スカートをめくっておむつの中を覗くと、そこには悪臭の元があった。一昨日ほど緩くはない。それなのにおもらししてしまったのか。

「出そうなの、気づかなかった？」

俺の言葉にほのかは頬を染めてコクリと頷いた。まさかこんな風にお

むつを汚すとは思っていなかったの、替えのおむつを準備してきていなかったのは失敗だった。さてどうしたものか。家までノーパンというわけにはいかないだろう。

「ほのか、ごめんな。にーに、替えのおむつ忘れてきちゃったんだ。だから帰るまでちょっと我慢してくれる？」

少し小首をかしげていたほのかだったが、にこっと微笑んでこくこくと頷いた。昨日のように泣くこともなく、おもしろしたことを何とも思っていないようなその表情に違和感を感じはしたが、今はそれよりもこの状況を何とかする方が先だ。

ほのかにスカートの裾を持たせて、そっとおむつをおろした。本当はサイドを破って脱がせるのだが、そうすると替えのおむつがなくなってしまう。靴下を汚さないようにそっとおむつを脱がせて、まずはほのかのおしりの後始末を始めた。

スカートの裾を腰のところに挟み込み、洗面台に手をつかせて、後ろからそっとトイレトペーパーでおしりの汚れをぬぐいとる。鏡に映る妹の表情は上気していて、汚れをぬぐうたびに鼻にかかった甘い声が聞こえてきた。もしかしてほのかはわざと……という自分の妄想を打ち消すように、自分の中の理性を総動員して手だけを動かした。次に汚れたおむつの中のものをできるだけトイレに流す。ゆるくはないが、それでも完全にきれいにできる訳ではない。トイレトペーパーでもふき取るが、かえって汚れが塗り拡げられてしまったかもしれない。

「ごめんな」

そう言っただけなのに一度汚したおむつをもう一度穿かせた。そんなこと、気持ち悪くて普通ならできないだろうに、ほのかは笑顔でおむつに脚を通した。おむつを一番上まで引き上げ、一度脱いですっかり冷えて

しまった吸収体がほのかの大事なところに触れた時、ほのかは一瞬びっくりした表情を浮かべ、それから幸せそうな笑顔へと変わっていった。

さすがにおもしろしたおむつでは歩きにくいし、気持ち悪いのだろう。ほのかは家に帰るまで幼子がそうするようにガニ股でよちよちと歩いていた。あの夜想像したままの妹の年齢不相応のその姿に、俺はこれから先理性を保てる自信がなかった。

数日後、学校から帰宅したほのかは自分の部屋にランドセルを放り込むと、制服から着替えもしないまま兄の部屋に入って行った。この時間、部屋の主は大学に行っている。母親もパートなので自宅には一人きりだった。

「おじゃまします……」

部屋の中に誰もいないものの、ほのかは一応そう断ってそっとドアを閉じた。部屋の中に漂う微かな男の体臭にほのかはぞくりと背筋を震わせて、一番その匂いが強いベッドに腰かけた。そしてスカートの上からそっと指で股をなぞるとそれだけでうっとりとした表情を浮かべた。

最近おもしろい量が多いので、という理由でトレーニングパンツの中に貼り付けてあるトレーニングパッドももう限界までおしっこを吸い込んでいて、ベッドに座るとぐじゅりとした感触が伝わってきた。すっかり冷たくなったおしっこが太ももやおしりを伝ってじわりと拡がる感触に、ほのかは思わず身震いした。多分制服のスカートだけではなく、このベッドにもシミができていることだろう。

「にーに、ベッド汚しちゃったのをメッして……」

うっとりとした瞳でほのかは制服のスカートの中へ指を入れて、トレパンをおしっこではない液体で濡らし始めていった。

ほのかにとって幼児以下のトイレのコントロールしかできないことはずっとコンプレックスだった。年下のいとこが昼はおるか、夜のおむつも取れて失敗しないのに、それよりもはるかに年上の自分が、遠出をするときは昼間でもおむつをあてられ、おしっこや、時にはうんちも漏らしておむつを替えてもらわなければならないのは屈辱以外の何物でもなかった。

しかし、兄の部屋で見つけた本がすべてを変えた。見つからないように本棚の奥に隠されていたその本には、自分よりも大人になっているにもかかわらずおむつをあてておもらしをし、陶酔した表情を浮かべている女性の姿が描かれていた。まだ性的なことを知らないほのかであっても、それがどういふものかを本能的に感じて、その本を見ながら知らぬ間に股間に指を這わせていた。初めて達した時、ほのかは快感とともに兄のベッドに大きな地図を描いてしまっていた。

兄の隠し持っている本には、他にも幼い女の子がおむつを汚してお仕置きをされているものもあった。ほのかはそのお仕置きをされている女の子を自分に置き換え、兄からおしりを叩かれたり縛られたりすることを想像して、誰もいない部屋で幼い秘所を慰めていた。兄の性的嗜好を知ってから、ほのかはずっと否定し続けていた「おもらしをしてしまう自分」の存在価値を認めることができた。

それから、よくなりかけていたほのかの失禁癖は加速度的に悪化していった。母親からあんまりおもらしが続くならトイレパンじゃなくて昼間もおむつにするよ？と言われたときも、表向きは嫌がるそぶりを見せたが、内心ではうれしくて思わずトイレパンにおしっこをちびってしまったほどだった。先日もプリーハートのイベント前にトイレに行く振りだけで、おしっこを我慢したまま兄の膝に座り、知らない人が見ている前で

我慢の限界を超えておむつにおもらしをしたのは理性が飛んでしまうほどに気持ち良かった。普通なら嫌悪でしかない、汚れたおむつを再度穿かされて、人目にさらされるという倒錯した行為もまた、快樂をもたらすものでしかなくなっていた。

「うんっ、んっ、にーに、ごめんなさい、にーに、あっ…」

学校にいるときからお腹の中で感じていた緩い異物があふれ出て、おしっことは異なる強いにおいが拡がっていった。一度勢いをつけて出始めたものはもう止めることはできなかった。この緩さだと多分ベッドにシミをつけてしまうだろう。これまでは兄のベッドにシミを付けてもおしっこだけだったので、おねしょしたことにしてごまかしてきていたが、今度はそうはいかない。ベッドを汚物で汚した自分のことを兄はどんなふうにお仕置きしてくれるのだろう。そのことを想像するだけでほのかの顔は紅潮し、さらにトイレパンの奥深くへ指が進んだ。

「にーに、にーにごめんなさい、あうう…ふあっ…」

小さなツインテールの頭がカクンと一つ跳ねると、スカートの下から水音が聞こえてきた。パッドとトイレパンの吸収力を超えたおしっこがスカートとベッドにしみ込んで、布団のシミは隠しようがないほど拡がっていた。

「ほの、またおもらししちゃったあ…えへへ…」

ほのかは帰ってきた兄に見つかって叱られることを夢見ながら、濡れたベッドに体を横たえた。きつと兄は母にこの失態を報告するだろう。そうなったら明日からはトイレパンではなく、あの本の中の女の人のようにおむつをあてられるに違いない。脚を持ち上げられて、赤ちゃんがそうされるような格好でテープ止めのおむつを当てられるかも。そう思う

だけでほのかの背筋には電気が走り、トレパンへところと新しい泉を
しみ込ませていった。もう年相応のパンツどころか、このトレパンも穿
かせてもらえないかもしれない。それでもいい。ほのかが大好きな兄は、
おむつが必要な自分を愛してくれる。羞恥と屈辱でしかなかった行為が
悦びとつながった瞬間から彼女の心は倒錯した方向へ成長してしまった。
「にーに……だあいすき……」

再びほのかの指は下腹部へと延びていった。

そこにいたのは兄を思う無垢な幼い少女ではなく、いびつな成長を遂
げて殻を破り、黒々とした羽を広げて欲情する一匹の牝だった。

(完)

マジカル・ラブリ☆チャームینگ く神様からのきまぐれで【魅了】
能力を授かったので、気になる同級生に使ってみたら」

平野月子

『おめでとう、朝比奈凛香!! そなたは先日のアンケートの結果、全人類の中からたった一人、神力のモニターに選ばれたのじゃ!』

夢の中に現れたのは、絵本に出てくる仙人みたいなおじいさんだった。全体的に真っ白な印象。服も白だし、長く立派なアゴヒゲと眉毛で顔の大半が覆われていて、頭の上では金の輪っかが光っていた。

『アンケート?』

私は首を傾げる。最近、何かアンケートのようなものに答えただろうか? 答えたような気もするし、答えていないような気もする。考えたけれど、頭がぼんやりとして思い出すことはできなかった。

『……ええと、どちら様でしょう?』

『ワシは神様じゃ!』

夢の中だし。神様が出てきても変じゃない、かもしれない。多分。

『そうなんです。それで、モニターとは……?』

もし声を掛けられたのが駅前や繁華街とかだったら、こんな怪しげな話には耳を貸さず、私はその場を通り過ぎただろう。だけど、これは私の夢だし。だから、ちょっとだけ好奇心が沸いて、この『カミサマ』の話聞いてみようかなという気になった。

『そなたには、好きな人と必ず結ばれる《恋愛成就のお守り》を渡そう』
恋愛成就と聞いて、心がドキンとする。

『お守りを身に着けたまま、相手に触れながら話しかけると《魅了》の効果が発動するぞい』

『魅了……』

『それで恋愛が成就してそなたはハッピーじゃ!!』

『えっ!?!』

いや、その流れはいくらなんでも大雑把過ぎないかな? と思ったけれど、神様は自信満々に胸を逸らしている。まあ、夢だしね。夢の中ならそんなものかもしれない……多分。

『あー……ありがとうございます』

『それじゃあ、あとは上手くやるんじゃぞ。もし、何か困ったことが起きたら、隣の山頂にある神社の賽銭箱にお賽銭を入れた後、「神様神様、お話を聞いてください」と言うといいぞい!』

『あ、はい。わかりました……』

恋愛成就の方法は大雑把なのに、お賽銭の話はやけに現実的だ。夢にまで、現実の私のツマラナイところを反映しなくてもいいのに、と私は思った。

変な夢を見たせいか、翌日の私はたっぷり寝たはずなのに寝不足だった。目覚まし時計のアラームに叩き起こされて、眠たい目を擦りながらなんとか身体を起こす。もっと寝ていたいと思うけれど、今、二度寝をしたら確実に寝過ごしてしまうだろう。

嫌々ベッドから降りると、私は机の上に見慣れないものを見つけた。ピンク色の布でできた小さな袋。生地には金の刺繍が施されていて、袋の上部には赤い紐で作られた複雑な形をしたリボンみたいなのがついている。それは、神社とかで売っているお守りのようだった。

こんなもの、買った記憶も貰った記憶もない。

不思議に思いながら手に取ってみると、ハラリとメモ用紙みたいなも

のが落ちてきた。

【使い方…お守りを身に着けたまま、相手に触れながら話しかけると《魅了》の効果が発動する】

夢で聞いたのと同じことが書いてある。

「まさか、本物……？」

私は、お守りをぎゅっと握りしめた。

結局、私はお守りをポケットの中に入れて、学校に來た。

登校してくる同級生たちに、笑顔で挨拶をする。学校での私は、成績優秀で容姿端麗。才色兼備の生徒会長ということになっている。

確かに、私の成績はいつもトップだし、街を歩いていたらスカウトに声を掛けられることだってある。だけど、本当の私はツマライ人間だ。学校の勉強は答えがあるから、それを間違えずに書くことができれば高得点が取れる。みんなに嫌われたくなくて、鏡の前で何度も笑顔を練習した。その成果が今の私だ。

せっかく作り上げた理想の自分像を崩したくなくて、必死でイイコを演じている。だけど、中身はカラッポ。私は、そんな自分が嫌いだった。

いつから自分はこんな風になってしまったんだろう。子供の頃は、もつと自分に素直に生きていたはずなのに。私は何かを間違えてしまったんだろうか。それはいつたい、いつ、どこで？ 考えてもわからなかった。

——それなら、赤ちゃんからやり直したら、私は自分のことが好きになれるかな？

そう考えた私は、おむつを履くことにした。薬局で、赤ちゃんサイズと大人サイズの中間のジュニアサイズというものを見つけて買ってみた。

「ちょっと背伸びをしたお姉さんっぽいデザインなんだけど、実はおむつ」というのがなんだか自分らしくて、私はすっかり気に入ってしまった。

初めておむつを履いたときはすぐドキドキしたけれど、さらさらのおむつにお尻を包まれているだけで、何故だか心が落ち着いていた。

高校生にもなって、おむつを履く。そんな自分のことは、誰も知らない。そう思ったなら、おむつを履いている自分が、本当の自分らしい自分なんじゃないかとすら思えるようになってきた。

そのうち私は学校にもおむつを履いて行くようになった。それは私にとってはとても刺激的で、すっかりそのドキドキが癖になってしまった。そのドキドキをもっと求めた私が、おむつを履いたまま学校でおもしろい遊びをするようになるまで、そんなに時間はかからなかった。

「ちーっす」

朝のHRが終わってから、坂井^{さかい}倶也^{ともや}が教室に入ってきた。

ボサボサの髪の毛。上靴の踵は履き潰されていて、制服のシャツのボタンはだらしく開いている。今日は正しい位置に留まっているけれど、日によつては、掛け違えていることもある。遅刻魔だし、授業中はいつも寝てるから赤点と補習の常連だ。

彼の存在を知ったとき、なんてだらしくなくてダメな人が居るんだろうと思った。だけど、彼を見ているといつも心のまま生きているようで、なんだか楽しそうに見えた。そしてそのうち、自由な彼が羨ましいと思うようになった。

「ちよつと、坂井。今、何時だと思ってるの!？」

「えーつと、九時？」

「そうよね。それで、学校が始まる時間は何時だったかしら？」

「でも授業にはちゃんと間に合ってるわけだし。いーじゃんいーじゃん、細かい事は」

「今日はHRの前に朝テストもあったんだけど？」

私がそう言ったら、彼は「しまった」という表情をした。

あああ、そうじゃない。そうじゃないのに。本当は、「なんで遅刻したのか」を聞き出して、「もし朝起きるのが苦手だったら、一緒に学校に来ない？」とか、「苦手な科目は一緒に勉強しない？」とか言いたかったのに。自分の心に素直になることが苦手な私は、いつも素っ気ない態度を取ってしまう。

「もうすぐ文化祭だつてあるでしょ？ 行事では、クラス全員の力を合わせる事が大事なの。だから、自分勝手な行動は……」

違う、そうじゃなくて。もうすぐ文化祭だから、せめて大きなイベントでは彼と一緒に行動して距離を縮めようと思って話題に出したのに、なんで私はこんな説教じみたことしか言えないんだろう。本当はもっと仲良くしたいのに。そして、彼のことをもっと知りたいのに。

こんな可愛げのない態度ばかり取っていたら、彼に嫌われてしまう。ううん、もしかしたらすでに嫌われちゃってるかもしれない。

不安になった私は、制服の上から、ポケットに入れたお守りに触れる。今、お守りの力を使ったら、どうなるんだろう。彼は私のことを好きになってくれるだろうか？ ……って、そんな、人を操るような真似をするなんて!!

はっと気付いた私はフルフルと頭を振った。このお守りの力は使うべきじゃない。そう思ったけれど、私はお守りを手放すことはできなかった。

そして、ついに文化祭当日がやってきた。

毎日制服のポケットにお守りを忍ばせているのに、私は一度もその力を使っていなかった。坂井には私のことを好きになってもらいとは思うけれど、お守りの力で好きになってももらっても、本当に私のことを好きになるわけじゃないのでは……と思って躊躇ってしまったのだ。

うちのクラスの今年の出し物は『ファンタジー喫茶』だ。世間では『メイド喫茶』なんかメジャーな気もするけれど、坂井の提案で、男女ともにゲームのキャラクターのようなコスプレをする喫茶店をすることになった。女子だけがメイドさんのコスプレをするのではなく、男女ともに楽しめるというコンセプトがクラスみんなに支持された。

最初はコスプレなんて何が楽しいのだろうと思っていたけれど、文化祭が近づいてきて、衣装合わせが始まったら、もうヤバかった。何がっていうと、坂井が格好良く見えて仕方ないのだ。坂井は剣士というか、勇者のような格好をしていた。普段はだらしない外見のせいで、ダメっぷりが視覚化されてしまっているのだけれど、冒険者の服を着た坂井は、私にとってはヒーローに見えた。

ちなみに、私が来ているのは白魔術師の衣装だ。クラスの男子たちによると、最近流行っているスマホゲームのキャラクターと私の外見が似ているらしい。衣装としては、フード付きの白いマントが身体全体を覆っていて、その下は、ブラジャーみたいな胸当て。下半身は、布をたっぷりと使ったスカートとロングブーツだ。最初は上半身の露出の高さに断ろうかと思ったけれど、マントを着ていいと言われたので、仕方なく了承した。というか、坂井から直接お願いされてしまったら、私に断れるはずなんてない。

『ファンタジー喫茶』はなかなか好評で、朝からひっきりなしにお客さんが訪れた。私も朝から目まぐるしく動き回って、予定の休憩時間を

三十分過ぎたところで、ようやくクラスの役割分担から解放された。

この後は生徒会の用事がある。後夜祭を仕切るのは生徒会の役目なので、その準備をしなければならない。着替える時間が惜しくて、私は白魔術師の衣装のまま、生徒会室に向かった。

いや、着替える時間が惜しくて……なんていうのは嘘だ。実は、坂井はこのキャラクターが一番好きなんだそうだ。昨日、そのことをたまたま知ってから、ドキドキと興奮が止まらなくなってしまった。

この衣装を着ていたら、坂井も私のことを好きになってくれるかな？ そんな打算もあって、私はわざと衣装から着替えなかったのだ。

生徒会室には誰も居なかった。別にそれは意外なことでもなんでもない。というのも、この時間、他のメンバーはクラスの出し物を担当しているから。さつき、ここに来るまでの間に、他の教室を覗いてちゃんと確認もした。

文化祭という非日常感と学校を包んでいる熱気が、私の行動とを大胆にさせたんだと思う。

私はマントを脱いで、机の上に置く。それから、スカートも脱ぐ。セクシーな胸当てと、可愛いおむつ。酷くアンバランスだけど、自分がそんな格好をしていることに興奮する。

イケナイ遊びにハマっちゃっている自覚はある。だけど、誰も来ないんだから大丈夫……そう自分に言い聞かせて、私は身体から力を抜いた。しよわわわわ……

私のお股から、おしっこが出ていく。だけど、私の粗相は全部おむつが吸い込んでくれる。私のダメなところも、全部、おむつが……
「なー、朝比奈ー！ ちょっと確認したいことがあるんだけど」

ちようどおしっこを全部出し切って、はぁと息を吐いたところで、ノックもなしにガチャリと生徒会室のドアが開いた。

「ひゃっ……!？」

ドアから顔を覗かせたのは、坂井だった。一方、私はコスプレをしておむつにおもらしをしたところで……

「えっ、なんで……!？ どうして!? えっ、ええっ……!？」
想定外の出来事にパニックになる。

え!? 見られた!? 何を……!？」

「あ、朝比奈……!？」

「と、とにかく早くドアを閉めてーっ!!」

「わ……悪い」

こんなタイミングで誰かが外を通りかかったら本当に洒落にならない。

「えーっと、鍵も閉めた方がいいのか？」

「いいに決まってるでしょっ!!」

咄嗟にそう言ってしまったけれど、なんで坂井は外に行かないで、生徒会室に入ってきてしまったんだろう。そのせいで、生徒会室で坂井と二人っきりになってしまった。

ドクドクと、自分の心臓の音がうるさい。

「あー、えーっとその……」

長い沈黙の後、先に口を開いたのは坂井だった。

「……それは、趣味？」

坂井が指さしているのは、紛れもなく私のおむつだった。

「そ、そうよ!! 趣味よ!! 何か悪い!?」

完全に全部バレてしまってるのに、なんで私はこんな言い方しかできないんだろう。

「い、いや……なんか、可愛いなと思って」

可愛い……!?

「な、何言ってるのよっ!？」

今、坂井が私のことを可愛いって言った!! 可愛いって言った……!! 緊張に嬉しさが合わさって、心臓がドキドキしすぎて息も上手くできない。私はよろめきそうになって、机に手をついた。ちょうど、マントが手に触れる。

「大丈夫か？」

私がよろめいたのを見て、坂井が手を差し伸べてくれた。そのまま、そっと肩を抱かれる。

え、坂井が私に触れている……!?

「……ほ、本当に私のこと、可愛いって思った……?」

「ほ、本当だけど……」

「そ、それじゃあ……おむつ交換してって言ったなら、してくれたりするわけ?」

私がそう言うと、坂井はぐくりと唾を飲み込んだ。

「いやなら、別に……」

「す、する!! おむつ交換……してやるよ!!」

なかなか返事をしない坂井に不安になって、前言撤回しようとしたところで、坂井が食い気味に言ってきた。これは奇跡だろうか? それとも、夢?

坂井は、生徒会室にあるソファの上に私のマントを広げて寝かせてくれた。おむつの予備は、生徒会長用の机の引き出しにこっそりしまっている。それを伝えたら、坂井が新しいおむつを持ってきてくれた。

「そ、それじゃあ、交換するぞ」

「ん……うん」

ベリベリと音を立てて、パンツタイプのおむつのサイドが破られる。そして、ペロリとおむつが捲られた。私のお股と恥ずかしいおもらしとが、坂井の目の前に晒される。私のお股は無毛だから、アソコがヒクヒクしているのも全部丸見えになってしまっていることだろう。

「な、なによ……!」

坂井が、私のお股をじっと見つめたまま動かない。そんなところをじっと見られたら、アソコがじゅわっと熱くなっちゃうじゃない!!

「な、なんでもない」

そう言った坂井は、おむつと一緒に置いてあったお尻拭きを手に取った。

「ひゃっ……」

火照った身体には濡れたお尻拭きが冷たく感じられて、思わず声を上げてしまう。

「わ、悪い……」

「だ、だいじょうぶ。びっくりしただけだから……」

私がそう言った後、二人の間に沈黙が落ちた。

黙々と坂井が私のお股を拭き清める。私のお股を濡らしているのは、おしっこだけじゃないってことは、バレてしまっているだろう。そう思ったら、恥ずかしいお汁が私のお股からまた溢れてしまう。坂井は何も言わず、丁寧にそれを拭ってくれた。

両脚を持ち上げられて、赤ちゃんみたいな格好でお尻も拭かれる。坂井は私の脚とお尻にしか触れていないけれど、あんまりにも心臓の音が五月蠅いから、このドキドキは伝わってしまうかもしれない。そう思っ

たら、私の心は余計にドキドキしたのだった。

ぎこちないながらも私のお股をキレイにしてくれた坂井は、最後に新しいおむつを履かせてくれた。

「できたぞ」

「……ありがとう」

私はそつと両手でおむつを隠した。といっても、私の手じゃおむつは全然隠れないんだけど。もつと恥ずかしい部分も見られたというのに、今更ながら恥ずかしくなってきたのだ。

「な、なによ……」

そんな私の手に坂井がそつと触れた。

「いや、せっかく可愛いのに……隠すの勿体ないなって思っ」

「えっ、ええっ!?」

坂井がまた可愛いって言った!? やっぱ、聞き間違いじゃないよね。

「え、えーつと……お、おむつが!? もしかして、あんたもおむつが好きなの?」

そうだ。坂井は私のことじゃなくて、おむつが可愛いって言っているのかもしれない。その可能性を失念していた。だから、私は恐る恐るそう言ったのだけ……

「いや。朝比奈が、おむつを履いてたら可愛いだろうなってずっと思っ
てたから……それで、実際見たら想像以上に可愛くて……」

えええええ——っ!?

「な、なんで!? まさか、そんなハズは……!? 私がおむつを履いてる
ことがバレて……!?!」

「い、いや。そうじゃないんだ。ただ、朝比奈を見ると何故だかおむ

つを履いてる姿を想像しちゃって……なんで、朝比奈のそんな姿を想像しちゃったのかは、わかんねーんだけど。でも、おむつを履いてる朝比奈のこと、可愛くて好きだなんて……」

「う、うそ……!?!」

まさかの坂井からの告白に、私は驚いて身体を起こした。いつも可愛げがない態度を取ってしまう私のことを、坂井が可愛いって思っているなんて……

「私も、坂井のことが……」

本心を伝えようとして、前のめりになったら、ソファの上に敷かれた衣装のマントに手が触れた。

そうだ、私は今日もあのお守りを学校に持ってきていた。それで、そのお守りは今、マントのポケットの中に入っていて……ということは。坂井が私のおむつを替えてくれたのも、可愛いって言ってくれたのも、好きって言ってくれのも、お守りの力のせい……

「……ありがとう。ねえ、もし私のことが好きなら……月曜日、付き合っ
て欲しいところがあるんだけど……」

「ああ、いいぜ」

いつもは売り言葉に買い言葉みたいな会話しかできない私たちなのに、坂井はあっさりと頷いてくれた。

これがお守りの効果なんだ……

私の胸の奥が、ツキンと痛んだ。

月曜日は、文化祭の代休だった。

私は朝から坂井と駅前で待ち合わせた。

『もし、何か困ったことが起きたら、隣町の山頂にある神社で「神様様、お話を聞いてください」と言うといいぞ!』

夢の中で、神様は確かにそう言った。

本来なら、大好きな人と想いが通じ合って初めてのお出かけ……つまり、デートなわけだから、うきうきと心が弾んでもいいはずだ。だけど、私の心はどんよりと重く沈んでいた。

「こんな朝早くから、いったいどこに行くつもりなんだ？」

「いいから、黙ってついてきて」

私たちが乗ったバスの終点は、隣町にある山の中腹だった。神様の話によると、神社は山頂にあるらしい。だから、バス停からは徒歩で山頂を目指すことにした。

一時間くらい山を登ったら、ようやくそれらしき場所に辿り着けた。

そこは、由緒正しき神社といった感じではなく、小さな鳥居があるだけの祠だった。ここにあると知らなければ、辿り着くことも難しそうだ。そして、祠の正面には立派な賽銭箱。鳥居より存在感の大きい賽銭箱のおかげで、この場所を見落とさなかったといえるくらいの存在感がある。「朝比奈って、こーゆーデートが趣味なの？ 意外というか、渋いというか……」

何の説明もなしにこんなところまで連れてこられた坂井は、首を傾げながらも、私と手を繋いでここまで来てくれた。いや、手を繋いでないと、途中で帰ってしまうのではないか不安だった私が、坂井の手を離せなかったのだ。私は、今日もお守りをポケットに忍ばせていた。

このお守りがある間は、『魅了』の効果で坂井は言うことをなんでも聞いてくれる。そう、このお守りがある間は……

私は繋いだ手を解くと、財布の中から百円玉を取り出して、賽銭箱に投げ込んだ。

「神様神様、お話を聞いてください」

手をあわせてそう言うと、目の前でポンと何かが弾けたような音がした。そして、もくもくとした煙の中から、夢で見たのと全く同じ神様が現れた。

「ほーい!! 何のご用じゃ？ ちゅーか、久しぶりじゃの!」

神様は私たちを見てそう言った。

「……神様……?」

突然現れた神様に、坂井がポカンとした表情で言った。うん、その気持ちはわかる。私だって、こんな不可解な現象、手元にお守りがなければ絶対に信じなかったと思うから。

「このお守りは、お返しします」

私はポケットからお守りを取り出すと、神様に向かって差し出した。

「おや、くーりんぐおふちゅーもんかの?」

「ええと、そうじゃなくて……いえ、そうなのかもしれないですけど……」

ここに来るまで、私はずっと考えていた。何をどうするのが最善なのかと。

このお守りの不思議な力があれば、坂井は私のことを好きでいてくれるだろう。

だけど、所詮は、お守りの力を使ったニセモノの恋人だ。ツマラナイ私にニセモノの恋人。それはとてもお似合いだと自虐的に思ってしまった。けれど、やっぱり、人の心を操るようなことは良くないと思う。

それに、お守りの力で坂井に「可愛い」とか「好きだ」なんて言っ

もらっても、虚しさが増すだけだ。だって、それは坂井の本心ではないのだから……

「お守りは返すので、坂井にかかった《魅了》の効果を消してください……!」

私は絞り出すような声で言った。

「ほお……! おぬしがそれを望むのか」

神様はアゴヒゲを触りながら、しばらく考えるような素振りをしていた。

「……それって、難しいでしょうか……?」

「いや。簡単じゃぞ。ただ……そうになると、そのお守りを手に入れてからのそなたたちの記憶が全部消えることになるが、それでも良いかの?」

「記憶……それは、私の記憶も、ですか?」

「そうじゃ」

「ちょ、ちよつと待ってくれ!! お守りとか《魅了》とか……いったい、何の話なんだ!?」

それまで神様と私のやりとりを見守っているだけだった坂井が、急に会話に入ってきた。

「そのまんまの意味じゃ。ワシがこの娘に渡したお守りには《魅了》の効果があつて……、つて。おや?」

坂井に話しかけた神様が首を傾げる。

「ちよつとそのお守り、貸してもらつていいかの?」

私がお守りを手渡すと、神様はおもむろにお守りの紐を解き始めた。

「……!?!」

お守りの袋つて、開けてはいけないものだったんじゃないか……つて、これは神様が作ったものだから、制作者本人なら別に開けてもいいのかな?

いったい何がしまったのかわからず、私たちはその突飛な行動を見守った。神様は複雑に結ばれた紐を解き終えた後、お守りの口を開けて中を覗き込んだ。

「あー……すまん、御神璽ごしんじを入れ忘れてしもたようじゃ……」

「ごしんじ……?」

「ああ、そうじゃ。この中には、お守りの効果を司るお札のようなものを入れるつもりだったんじゃないか……どうやら、それを入れ忘れてしまったようじゃ。いやー、すまんすまん」

「えーつと……それじゃあ、つまり……?」

「つまり、このお守りは……実際はお守りではなくて、効果も何もないきゅーとで可愛いただの袋だったつちゅーわけじゃな!」

「えっ、ええっ!? はああ……!?!」

神様の言葉に、私は思わず絶句した。

え、それじゃあ、坂井が私に「好き」って言ったのも、「おむつ姿が可愛い」って言ったのも……

「あああ、だよな。朝比奈がいつそのお守りを手に入れたかなんてわっかんねーけど、朝比奈が可愛いって思ったのも、おむつ姿が見たいなって思ったのも、結構前からだったから。なんかヘンだと思ったんだよねー!」

「えっ、えっ、ええ!? つ、つまり……!?!」

坂井の言葉に、私の頬が熱くなる。

「つまり、オレが朝比奈のことを好きなのはお守りの力のせいじゃなかったってこと!」

その言葉を聞いて、私の顔に熱が集まる。

「そ、そうなのね。ということは……勘違いでこんなところまで連れて

来て悪かったわね！」

《魅了》の効果がなくなったら、坂井は私なんかのことを好きでもな
んでもなくなる。だから、その前にちょっとでも甘えておこうだなんて
思ったのが裏目に出た。ここに来るまでの間の自分の行動を思い返す。
バスの中でも山道でも、私は坂井にピッタリとくっついていた気がする。
「朝比奈は、勘違いで好きでもない男におむつ交換させたり、学校が休
みの日にバスで身体をびったりと寄せてきたり、手を引っ張ってここま
で一緒に来たりするのかなー？」

坂井が意地の悪い顔で私に聞く。

元々は自分の撒いた種とはいえ、バツが悪すぎる……!!

「さ。用事も済んだことだし。帰るわよ！」

「えー……オレ、まだ聞いてないんだけどなあ？」

「な……なにを、よ」

「朝比奈からの、告白」

「こ、告白って……!!」

こんなところで、言えるわけなんてない。

「まあまあ。それは、二人っきりのときにゆっくりやりなされ。とりあ
えず、おまえさんたちは元の場所に帰してやろう」

神様がそう言うと、さあっと風が吹いた。

—— 今度こそ、二人仲良く幸せにな ——

風の中で、神様の声が聞こえた気がした。

気が付けば、私たちは朝待ち合わせをした駅前に居た。

「あ、あれ……？」

「……あー神様って一応ホンモノだったんだな」

坂井の言葉で、私はお互いの記憶が消えていないことを知る。だけど、
ポケットに手を入れてみても、もうお守りはそこにはなかった。

「ところで、朝比奈はこの後、どうする？ デートの続きでもする？」

「で、ででデートお!? な、何言ってるのよ!？」

そんなの嬉し恥ずかしすぎる……!!

「え、何かダメ？ オレたち、恋人同士……じゃねえの？」

私が恥ずかしさに震えていたら、さらなる爆弾が投下された。

「こ、ここここ……!!」

「あー、オレの勘違いだったらもう帰るけど……」

「か、勘違いじゃないわ!!」

「じゃあ、オレのこと好き？」

「ちよ、ちよっと!? こんなところで何を……」

「だってさっき言ってもらえなかったし……」

「そ、それはね。タイピングとシチュエーションつてものが……!!」

「そっか。それじゃあ、告白のかわりにキスでもいいぞ」

「は、はあっ!? こんなところで!! ばっかじゃないの!？」

「それじゃあ……」

「す、好きよっ!! これでいーんでしょっ!？」

「よくできました。ご褒美に、デート中おもらしたら、オレがおむつ

替えてやるよ」

「はあ!? そんなことで私が喜ぶと思って……」

「ううん、オレが朝比奈のおむつを替えてあげたいだけ。だって、おむ
つを履いた朝比奈のことが好きだからな」

坂井の言葉に、私は顔を赤くして口をパクパクさせたのだった。

おわり

布おむつと紙おむつ

どちらが好きか？ という話になることが
あると思いますが、私はどちらも好きです。

平成10年頃、世間はもう紙おむつの時代
でしたが、私のいた保育園はまだ布おむつ
でした。

ほとんどの子は紙おむつで登園して、保育園
に着くと布おむつに着替えさせてもらってか
ら保育園の中で過ごしました。

そして降園の時間になると紙おむつに着替
えさせてもらって、お迎えが来ることで親元
での生活に戻りました。

そんなわけで『保育園での布おむつ』
『親元での紙おむつ』という二つのおむつの
イメージが私の中に残りました。

……令和の今ではどうなのでしょう？

保育園の布おむつは貸しおむつ業者さんが
洗濯をして持ってきてくれるのですが、その
業者さんは今でも健在でした。

※このスペースのイラストは
「おむつつ娘 PARTY!」
7号・8号 に掲載した
ものから加筆再掲しました



以前よりもその数は減ってい
ると思いますが、もしかした
ら令和時代の子にも『布おむつ
は保育園で着ける、ちょっと違
うおむつ』として記憶に残るこ
とがあったりするのかな… と
思いを馳せます。

貸しおむつ業者さんが持っ
てきた新しい布おむつを、先生と
それを着けることになる子供が
一緒になって折りたたんだこと
が思い出として残っています。

瑞光ちのん

お嬢様ランチ情報No.12 in COMITIA 143

2023年2月19日
お嬢様ランチ発行

■ スミに商業情報です。三和出版発行の『フェティッシュライト/バルズ』
おむなな女の子が恋しちゃダメですか? 1に2、小林キリさんの作品の
挿絵イラストを担当させて頂きました。おむななとお嬢さまの
百合えちおむななぐしゅぐしゅ バルズです。ご興味
ありましたらぜひぜひ。

この本
です
↓



※『おむ☆フェス9』に
合わせて再録しました。



ハズかしいな
もー

更新頻度は低めですが、
私、ジョン・マロの活動場所です。
是非ともフォローをお願いします！

Twitter: @John_Mar0

Pixiv : 14598663

FANBOX :

<https://johnmaro.fanbox.cc/>



祝10周年

おむつエッチ漫画家「蜜姫モカ」は
今年でめでたく10周年を迎えました。

これもひとえに応援してくださる
ファンの皆様のおかげです。
ありがとうございます♡

これからも沢山おむつ漫画
書いていきたいですね！

今発売中の
新作ばぶばぶ音声のお知らせです♡

新作バブバブ！



旧作サキュバス！



フイライン ベイビーズ
Feline Babies

可愛い大人の赤ちゃんのための
ベビー룩ファッション

おむつカバー・布おしめ・ベビーハット・スタイ・ミトン・ロンパース etc...

■お取り扱い店舗一覧■

☆秋葉原ラブメルシー☆

〒101-0021 東京都千代田区外神田1-2-7

JR秋葉原駅 電気街口出て徒歩1分

☆DEEP☆

〒460-0013 名古屋市中区上前津1-3-14

名古屋地下鉄上前津駅7番出口スグ

☆利根書店 深谷店本館☆

〒366-0033 埼玉県深谷市国済寺577-1

国道17号沿い いっちよう様向かい

最寄駅：JR高崎線 深谷駅から2km

最寄IC：花園IC

☆利根書店 前橋野中店☆

〒379-2166 群馬県前橋市野中町278-6

国道50号沿い Bウエーブ様となり

最寄駅：前橋大島駅から徒歩18分

最寄IC：駒形ICから車で10分

☆大人のおもちゃ通販大魔王様☆

※通販のみ

■コラボレーション■

☆三和出版☆

☆おとなの保育専門店『B' Fles』☆

☆渋谷幼児プレイ専門 『乳パラ』☆



<http://fb.omport.cc/>

Since:2013年6月30日

10th
Anniversary

おむっっ娘PARTY!9

おむっっ娘プチオンリー『おむ☆フェス9』開催記念合同誌

『おむ☆フェス8』 アフターレポート (2022年9月25日開催)

第8回目のおむっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス8』は、サンシャインクリエイション 2022 Autumnにて開催されました。簡単ではありますが、アフターレポートとして内容をご紹介します。

- ◆開催場所：池袋サンシャインシティ ワールドインポートマート4階 (A23ホール)
- ◆おむ☆フェス8参加サークル：12サークル

イベント直前に立て続けに台風の襲来があり、当日の気候が大変心配されましたが、台風が大急ぎで駆け抜けて行ってくれたため、イベント当日はとても良いお天気になりました！！

またイベントが開催された時期は新型コロナウイルス感染症第7波も落ち着きを見せ始め、今回は遠方からの来場者も多かったように思います。イベント開催前から、SNS上ではイベントに対する期待と盛り上がりが見られました。

感染症以外の懸念としては、表現に対する様々な方面からの気になる規制がいくつかあったように思います。

開催中の様子ですが、次のような感じでした。

- ・開場直後から、会場内は多くの来場者でにぎわいました。随分、人出が戻ってきた印象です。
- ・今回も、入場制限や入れ替えは発生しませんでした。
- ・来場者さん同士でも交流が行われ、大変盛り上がっているようでした。
- ・感染症対策に配慮し、今回は「シールラリー」を実施しました。

久しぶりに活気のある『おむ☆フェス』の開催となりました…!!

いつも参加してくださっている皆様、ここしばらくは来れなかった皆様、そして今回初めて来てくださった皆様……!!

大勢の方に来ていただけたと思います。また、事前からイベント中、イベント後まで、SNS等でおむ☆フェスに参加してくださった様子を発信してくださる方がたくさんいてくださり、オンライン上でも賑わっていた印象でした。

シールラリーは今回初めて行いましたが、楽しめていただけたようで良かったです。ただ、システムの周知が不十分で、一部の参加者に内容が正しく伝わっていなかった点は、次回以降の改善点といたします。

ちなみに、おむ☆フェス9では『おむ☆フェス大抽選会』が復活します!! 皆様、是非ご参加くださいね!!



▲フライヤー/蜜姫モカ様



▲看板娘/雛良様



▲開催記念合同誌/蜜姫モカ様



▲おむ☆フェス準備会スペース



▲イベントスペースの様子



▲おむ☆フェス8のれん

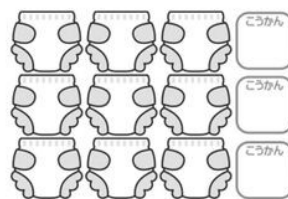


おむ☆フェス8 シールラリーについて
「おむ☆フェス8」参加サークル様から配布されるシールを集めてください。※シールの配布条件はサークル様ごとに異なります。

シール3枚ごとに、「おむ☆フェス準備会」スペース[F14-a]にて景品+抽選シール(抽選番号が書かれています)をプレゼント!抽選シールは「こうかん」に貼ります。

抽選シールの番号が当選すれば、景品を賞品ゲート! 当選番号の発表は13:00頃を予定。(「おむ☆フェス準備会」スペース[F14-a]様のシールラリーの看板に掲示予定。Twitter(@omufes)でもお知らせします)※状況により、抽選時刻が早まる場合があります。時刻が早まる場合も看板とTwitterで告知します。

当選された方は、すみやかに「各スペース」まで賞品を受け取りに行ってください。※一定時間内に受け取られなかった場合は、再度抽選を行います。ご了承ください。



▲おむ☆フェス8 シールラリー台紙



▲おむ☆フェス8 シールラリー景品

おむ☆フェス準備会 賞 B3 タペストリー 各1名

引換場所:F14-a おむ☆フェス準備会

当選番号



イラスト:蜜姫モカ
※先着順でお好きな絵柄をお選びください

提供: おむ☆フェス準備会

Feline Babies 賞 おむつ交換シート 1名

引換場所:F14-b Feline Babies

当選番号



提供: おむ☆フェス準備会

こんどーる 賞 マイクロファイバータオル 5名

引換場所:F18-a こんどーる

当選番号



提供: コンドル様

TASMANIA GARDEN 賞 オリジナルTシャツ 1名

引換場所:F15-b TASMANIA GARDEN

当選番号

※色はブルーです



サイズ:M

提供: とら様

おでん缶 賞 ベビービブ&刺繍バッジセット 各1名

引換場所:F18-b おでん缶

当選番号



提供: 狂犬もちこ様

B-DASH JUMP 賞 ラミネートおきがえセット 3名

引換場所:F17-a B-DASH JUMP

当選番号



※♡の修正はボスター用です

提供: 日向あい様

▲おむ☆フェス8 シールラリー Wチャンス抽選会景品

あとかき

①P.N ②サークル名 ③HPアドレス ④Pixiv ⑤twitter

Thank you for Reading!
ジョン・マロ



①ジョン・マロ ④14598663 ⑤J0hn_Mar0

『淫紋おむつは契約の証』

二人とも新たなオリジナルです。
サキュバスのカルラちゃんと千寛(ちひろ)くんは契約を
結んだ証にお揃いの淫紋付きおむつをして…

『妖精さんと一緒に2』

私のオリジナルのローザちゃん(エルザちゃんの親友)と、
新キャラの妖精アレッサちゃん。仲良くアイス柄のおむつ
をしてアイスクリームを食べています。

皆様、毎度お世話になっております。

『おむ☆フェス9』の開催を心よりお祝い申し上げます。
この度もカラー絵2枚で参加させて頂き有り難うございます。
最終締め切りに間に合わず、平野様にはご迷惑をおかけ
してしまい申し訳ございません。

9回目を迎えた今も、まだ描きたいものが沢山あります。
今後も「おむつ」な創作の場に皆様と参加させて頂きたい
と思います。



シヨタT督

①シヨタT督 ④657971 ⑤T_Yasagure

個人サークル「ジンギス会」
にておむつ系の同人誌を
制作しています！

最近三和出版様の
「おむつ倶楽部 43号」
にてイラストを寄稿させて
頂きました！(左の奴です)

今後も細く長く同人活動や
イラスト制作、寄稿などを
やっていきたいです！

また、PixivやSkebにて
イラストのリクエストも
受け付けておりますので
宜しくお願い致します！

Twitter:@kaityo_omo
Misskey:@kaityo_omo
Pixiv:65934677
Skeb:@kaityo_omo



①羊会長 ②ジンギス会 ④65934677 ⑤kaityo_omo

おむつジャンルは新参者で、まだまだ勉強中です。
彼女♥(御手洗さん)とも今後よろしく
お願いいたします。



お子様ランチ
西野沢かおり介

①西野沢かおり介 ②お子様ランチ ⑤oksm2021
③<http://www.ni.bekkoame.ne.jp/okosama/>

名前変えました

はじめまして。
前回Cashuだったものです。
これからは山野すももを
名乗っていきます。

ちなみに僕は
おさびが好き。



①山野すもも ④58055420 ⑤CashuAbdl

祝！ 第九回おむ☆フェス開催

皆様こんにちは、God Hand Marです。おむ☆フェスが9回に到達しました。9と言ったら一桁最大の数字ですよ。次からはもう二桁なんですよ。凄い！

さて、今回のイラストは親の権力で悪行をもみ消している最低な女の子にオシオキをしました。こんなことをされたらもうまともな人生は送れないでしょう。ネット上に恥ずかしい姿と個人情報が流れてしまったのですから。そういうことなので、皆さんも個人情報の取り扱いには十分気を付けてください。一度ネットに流出してしまった情報というのはデジタルタトゥーとなって永遠に残ってしまいますから。

①God Hand Mar ②God Hand Mar
④1435719 ⑤God_Hand_Mar



にゃんにゃんにゃん♡

①雛良 ②e.g.g. ④2236047

どうもです、日向あおいと申します。
基本的には妙齡の女性のおむつ姿に
萌える性質なのですが、今回は色んな
年代の娘を描いてみました。
ちっちゃい子はバランスが難しいです…

なお、【三つ子の魂百まで】とは
「小さい頃の性質は、
大きくなっても変わらない」
というような感じのことわざです。
…まあ、変わった方がいい事も
あるかもしれませんね！
では！(´ω´)ノ

①日向あおい ②B-DASH JUMP ④1935432 ⑤ahOi

普段は勝ち気で高貴な姫騎士が、
実は夜のおむつが卒業できていないなんて、
すごく良いよね！しね！？

というわけで、今回はそんなギャップ萌え
な感じで書かせてもらいました！

おしっこメインのRPG作ってます、
ピアードです！
RPG部分以外にも、このRPG:
キャラ達が普段どんな風におしっこしているのか
記録するシステムなんかを
最近実装しました！



体験版のDL等はCi-enの方でできますので是非！
<https://ci-en.dlsite.com/creator/1418>

①ピアード ④877149 ⑤isima_taku

汚れたおむつを開いて 恥ずかしがる瞬間が 一番好きです

第9回の開催おめでとうございます
今回は『おにまい！』になりました
公式でおもらし属性が2人もいる
アニメです！ぜひ見ましょう！
もみまひ派です！（でも全部OK）

サークル：幼海エーリアン
うみノ爬虫類

もみじょぼ
はいいぞ。

①うみノ爬虫類 ②幼海エーリアン
④12366173 ⑤umityanADS

おむ☆フェス9

開催おめでとう
ございます!!

気が付けば9回目…!

これからもおむつに思
いを寄せる人々に支持さ
れるイベントであり続け
ますよう、応援します。

瑞光ちのん 拝



①瑞光ちのん ②はだあしや ④145724 ⑤tinonn

こんにちは、ラッセルヘッドです。今回も
平野様には大変お世話になり、ありが
うございました。今回は身内が見る可能
性もあるので少し甘めの話にしようと思
ったのですが、なぜか変態少女が錬成さ
れてしまいました。

①russellheadd ⑤russellheadd3

おむ☆フェス9 開催、 おめでとうございます!

最初に思い描いたイラストとは
全然別物になったけど、
楽しく描くことができました。

たく@スパイラルクリーム

①たく ②スパイラルクリーム
④69298569 ⑤SpiralCreamTaku



おむ☆フェス9
開催おめでとう
ございます!

今回、打ち上げに参加できないですが、
平和の祈りと祝福を皆様に差し上げます。
今後ともよろしくお願いいたします!

星山カケル

①星山カケル ④2616722 ⑤kakeru_jean

こんにちは。平野月子です。

おむつ小説を書き始めてから10年になりました!! 10
年という数字に、自分でもびっくりしています。

平野月子という名前は、三和出版さんのおむつ倶楽部
で小説を掲載していただくことが決まってから、大慌て
で考えました。とても馴染んでいるせいか、よく本名と
間違われます(笑) 10年も使っていれば、もうほとんど
本名みたいなものですね。

今回の小説は、前回の合同誌の小説の女の子ver.&そ
の後のお話です。前回原稿を書いているときに同時進
行で構想があったので、無事書き上げられて良かった
です。前回のを読んでいなくてもわかるように書いて
ありますが、もしよろしければ、前回の小説も読んでい
ただけると嬉しいです!!

今年もいっぱい小説書くぞー!!

平野月子

①平野月子 ②Sugar Baby ④9757041 ⑤hiranotsukiko

僕らはずっとおむつ。

蜜姫モカ

①蜜姫モカ ②Teamはれんち ④58815 ⑤Mituhime_G
③<http://58niconico.web.fc2.com/>

編集後記

こんにちは。平野月子です。このたびは、おむ☆フェス9開催記念合同誌『おむつつ娘PARTY!9』をお手に取っていただきありがとうございます。

いよいよおむ☆フェスも9回目……次は、いよいよ10回目になります。開催当初は「10回続ければ、何か世界は変わるかな?」と思っていました。どうでしょう、おむつジャンルを取り巻く世界は変わりましたでしょうか? イベントとしてはここ数回は、とにかく「感染症対策」に振り回さられていた気がします。それでも、回を重ねるごとに、世の中は前進しているんだなって思えるできごとはあったので、きっと、少しずつ良くなっているのだと思います。

来年は、また違った景色を皆さんと一緒に見ることができるでしょうか? 今から、ドキドキワクワクしています。いつも、イベントを開催するときは「イベントを通じて、作家さんや読者さんになにかいいことがありますように」と思っています。新しい出会いが素敵な出会いになりますように……!!

『おむ☆フェス』や、『おむつつ娘PARTY!』をきっかけに興味を持ってくださった方がその中に居らっしゃるのであれば、嬉しく思います!! また、今までもずっと「おむつ」が好きだった方が、もっと好きになってくだされのも、もちろん嬉しいです!!

次回はもっともっとパワーアップしたイベントをお届けできればと思います。こんなに長く続けられたのも、支えてくださる皆様のおかげです。

いつもおむ☆フェスに参加してくださっている方、今回、初めてこの合同誌・イベントに参加してくださった方、おむ☆フェスを通しておむつつ娘というジャンルを知ってくださった方、そしてこの場を提供してくださったクリエイション事務局の皆様。今回も多くの方に支えられてこのイベントを開催することができました。このイベントが皆様の新しい出会いへの懸け橋となれば幸いです。このたびも、『おむ☆フェス9』に関わってくださった、支えてくださった全ての方に、感謝の気持ちを込めて。

2023.6.18 平野月子



奥付

■誌名■

「おむつつ娘PARTY!9」
おむつつ娘プチオンリーイベント
おむ☆フェス9開催記念合同誌

■企画・編集・発行■

平野月子 [おむ☆フェス準備会]

■表紙イラスト■

蜜姫モカ [Teamはれんち]

■裏表紙イラスト(看板娘)■

たく [スパイラルクリーム]

■プチオンリーのれん■

星山カケル

■おむ☆フェス公式サイト■

<http://omufes.web.fc2.com/>

■「おむつつ娘PARTY!9」特設サイト■

<http://omufes.web.fc2.com/omparty9/>

■発行日■

2023.6.18

おむつつ娘プチオンリーイベント「おむ☆フェス9」
(サンシャインクリエイション2023 Summer内開催)

■印刷■

オレンジ工房.com様

おむっっ娘PARTY!9

おむっっ娘プチオンリー『おむ☆フェス9』開催記念合同誌

